

風俗文選犬註解
貳之上





風俗文選犬註解卷之貳

江都

佐保姓

祥日分我著

南都賦

汶卯

文選陸士衡文賦

賦ハ體物而瀏亮ク賦ハ以陳事故ニ曰體物ヲ

元明天皇代和銅三年より桓武天皇延暦三年迄七十余年

自東京の地あり

書紀 崇神卷 埴安彦妻吾田姫ハニヤスヒコと反逆していくさを起しアタラヒ忽ち

至る各道を分つ夫々山脊シロより岨は大坂より共に入ニ帝京ミヤコを籠

んとす又大彦と和珥ニ乃臣トホツの遠祖トホツ彦ヒコ武尊ニを山ニ入リつゝハ

埴安彦を討しむるは忌免イハヒを和珥ニ乃ニけす坂の上よりニ其

も則奈良山ニのありて軍ニとちニ名ニ軍ニいニみて草木をニあニりニきニ其

山をニあニりニて那羅山ニといふ奈良といふ名ニの由ニなり

青丹より奈良の都々ニいニふニらニハ三笠の山乃ニ麓ニあり元明天皇和銅

二年最京乃宮より以京に移さる。大宮殿 大佛殿 佛神をあらうる。王法を輔く宮乃社月日の宮竈殿 鏡乃神ハたちる乃度徳を

青丹より八奈良の冠詞なり 青丹ハ土なり 埴 赤土 青土

文武天皇母元明天皇始て奈良の都を建ふ同三年遷都あり

左京ハ今乃南都右京ハ西京をいふ最京の宮市郡 鴨栖坂の

才三天兒屋根命 才四姫大神はめハ陸奥ハ地竈の浦ハ天

供奉の随者ハ阿部秀行乃あ人なり舎人ハ乙武丸をいふ

其時時風秀行儀也を奉るに

神感より植栗の姓をいふ阿部秀行乃末系中臣の姓の下に 植栗氏をいふ

朝野群載曰大佛殿高十五丈六尺東西二十九丈南北十七丈基砌

三千百廿五廻廊柱五百八十本東西八十五間南北百間是殿初

天平年中造建大間也本尊盧舍那佛坐像長五丈三尺五寸

三月三日なり鏡の神は物薬師の南あり尾上宮ハ高志山あり

神ありの小けしをいふ

あ

奈良の帝は宇奈布大後淡海ふひとの孫式部卿宇奈布の皇子と云
 るの後の少将兼太宰の少貳藤原の彦継天平十二年肥後小松浦
 郡にてむろんを起し一万人の送徒をおかからし帝をかくし奉らんと
 ありしは花治のさきなるのめりし大野東人を大將軍として左軍
 二万余騎をきしぬられ度つるをちうかつのあつし心則ひろく誅
 して依り其靈をうらむるをうらむれハ神といふいふふとがや
 氷室率川東大寺乃八幡二月堂はあ狭井の三月堂四月堂鈎鐘
 は久我入道の詩をとりめ大門の折釘は源頼朝の幕を張貞福寺々
 七堂伽藍始ハ山階寺といひ中ころはる屋寺といふ

西行撰集抄 率川の社々春日の由やろよははうに川のけくいさ
 うはと申けんそくの神おはすまひ
 率川ハ元化天皇宮造の地よりて伊那河宮と申奉る率川は坐に
 大神の山子の神社率川阿波ノ神社率川々春日山より出てき
 沃の南をるて子守町の南の方を流す小川也
 神祇今々孟夏三枝祭義解率川ノ社ノ祭也 以三枝ノ花

飾酒罇タルナ一祭ル故曰三枝けさつぐさ百合の花もつり百合もとの
 名佐サイ幸新井氏曰百合を由理といふハ韓地の方言なり
 東大寺一名華嚴寺又五分寺といふ二月堂は狭井毎年二
 月十二日のおみほ祭必遠来の神あのみくし川の流るる音
 ありしを音なり川といふ二月の水取といふなり

水ぬきこりの僧の音の音
 三月堂ハ法花堂四月堂ハ三昧堂あり鈎鐘ハ天平四年始と
 鑄り高廿一丈三尺五寸口のりく九尺一寸三歩厚廿八寸寛文記曰
 奈良の語曰勢ハ東大寺形ハ平等院声ハ三井寺

青丹より奈良の都々さく花の白ふり如く今さつらなり
 志のうのめぬきのちかさをさけはきそ奈良の都を福ハ誰くもそ
 東金堂中金堂食堂講堂南圓堂ハ神階落のまをうつて頂礼
 の札を納め東齋堂ハいりハの八重桜を跡ハ花壇の庄を領候
 東金堂ハ神龜元年七月元正帝ハ昭の附玉辨安徳の由祈り
 に聖武帝ハ建立本尊藥師佛中金堂々本尊丈六の

西金堂の樂をあつたため南大門にうつて薪乃能を始む七夜の使は
四坐の猿樂をめぐり雨天は紙を踏んで試み夜陰より薪を積んで焚く保
生、鉦の本は名人の号をとり大倉の芭蕉は達人の名をあつた水鏡は
能宮の能春日祭は素結は大倉の頭をつつみて大舞表はつら
なり錦を着て松の下より矢乃立合を意ふ頭登り兒々シヤウキ休木は腰を掛け
赤衣の仕丁は棒を横ふ大倉馬大倉鎧大太刀持小太刀持ケイハ流鏝ハブガシる
長谷川堂を甲曹を帯り射子の呪は後箇は弓矢を持関白代々東
帯りて後の花をかぎりバギヨの兒々供つれて腰は本履をつらハイケレの神
子奈良の神子細男氷室舟の樂人トカニ拍子カンテハ仕丁乃宿老頭登のハ幣田
樂のビレゴ春々二月の雪をちりちり霜月の花をささぐ

南大門々金剛カ士の二王の像をある士人沃浮つとよふ夜は沃浮
をりり射り新の能々四坐の方丈毎年二月十日より勤て十日の終
まむ四坐の役者の昔を尋るに共説まらるる中に聖徳太子以下泰の川勝
は令て二十六番は西をつつて紫震屋のおりて舞をせ侍らまらるる
其舞神樂のにはならぬはとて神の字をふて申樂と名づけりといや

例式は弘仁十二年東金堂ハ八相の花西金堂ハ三相の花六十種の花を
かぎり擁護の靈神オウゴ持實の諸神を勧請して供養せらるるは法令の自
ハ益救をもとる薪を焚とよけ時唐の人來つて西金堂の場へて舞かま
りるとそ其後清和天皇貞觀六年のころより純白の貞觀十三年
風吹かたり雷まき落空かきりりれハ大流おとろきせんきまらりて
是かこの神の法會をあるるを焚めよと傳はんと満坐一回りて舞を起
西金堂の法令を南大門よりうつて行くとまろく人の舞かまらるる日
例なれはとて能をもつめらるるは薪の能はけめらるる法會は陰まらるる寺
信春宮は壇へつてつあはれてたきを焚共先よりきて御優をなり長
叔のあはれと紙を焚てるのふるまをまめらるる紙を焚てる
何れけむらりけ何れ宮も能あり四坐ハ觀世 今春 保生
大倉 又 奈良坐ともつら
素結は大倉の頭をつつむ 唐土揚別のもう寺のかんち和尚日
本は法海して佛法を弘めんとめり時其つ身ホとめらるるは長袋平
頭をつつみ顔をかきりて和尚をとめらるるは和尚日城佛法

春日祭縮圖

大太刀持
小太刀持

野方ノ十振長サニる余
小方ノ五十腰

大名馬 百三十三疋

大和大名其外よりゆき
馬帽子素襖

大名鎧 百三十本
射多の兜

以旅あそく流鎧馬を
槍の組笠麻の皮乃



むらたきをぬる

文中ハ平ヨの呪と

あつハ馬長の呪也十

馬長呪 五騎

兜ひで笠子山智の尾をさ

五色の細き低く五羽着る高笑

の袴衣さーめを後又牡丹の花を

角のふ

大童子入白浪金の海鬘末廣を持

又三人ノ竜をわくさ白浪着の丸乃紋

休又五色の短冊を付腰ノ木履一足ヲ付る

一ツ物といふ短冊又遠くふまをるまをのふを

めけかき付あり

顔をの呪テ人影向松の下林木ニ腰を掛る

細男六騎 歌向松子ゆひの笛つみろく音楽あり

くろくハあ官のわ礼の圖あり



鳥寫

東統の志ありて南都へありぬひ大堂を建立しぬがらつてみの大
元といふらきなり

春日祭ら大宮四所の以神するあり一年又あなりて二月申の日十二月
申の日又ありけ祭式ハ仁明帝嘉祥三年九月に中良秀基始めて奏
すを履て其後清和帝貞觀十一年十二月九日庚申の扱よりけりて
行きのふはし祭ハ霜月廿六日掛多を祭通照院と号し霜月廿二
祭の願主人長谷川遠あつたり十一月晦日竜田川を行て振離し
より明神を勧請し十月廿五日以湯を奏し十月廿六日社系せり是を通
照院のわらとつふ以院ハ小を建つてて雉子二百五十六羽うさき
百廿四斗狸百四十二足の贄をかけきく公饗のかき物献菓子
なとくらく盛つて規式なり

春日の宮 神樂あり

君の代のえりてききめハ神も極らん住よりハ松やれ住よりハ
松やれ 春日山ハ松の松といふとよきとせをみよりの色こりる等乃
流る音せと美威のひききりなり 三笠山ハ松の松の松

とにえの君も君も葉也(きき)葉也(きき)や也(ぬ)根(木)の代
よの末の代といつれえとや 君のそえん かつきえとや君のそ
えん かつれえとや君のそえん 子代述ハ君のいぬら三
笠山峯よりおき声きこむやれききこむやれ松といふの由め
一ハ三笠ハ春日山の娘ハ子代の玉椿いつぬき川はすむ霧の長ね
の浦ハ松の電霧の子の又つるの子おやハ子乃そむ代述君ハま
ませやも君もませ 宮人のする衣はする衣よ
ゆきすまかけて心まやくれよすん美代の松の心のかけ志け
君をそいの時きはかきははやれ 神明度よませませハ一切
諸願もすあ一方代りれハなりれハかむこも垂て伝へせん我あ乃
子代の川升あるとほみさもあす志のそるうらうらふれはるう
らうらうらやわ極てるうらうらあまのまうきの代のまうき
の代のくくあーこにいやこもれる子代く 君のそえん
いやこもける子代君のそえん

細男ハ振針さいらうと振舞三節と東西の仮習よりて舞と

尼からのちをよみ大伴家持尼はあつてくられて末の句をつく

佐保川の水をせき上て極一田也 尼作

川よりさいひらひとひらひとあるす 家持

往古ら佐保の花立田の歌よとて名取の才一すこ右部多一

佐保姫や奈良の帝のまほしき 靉 青娥

さゆいせやふういの西のいづうむ

一位二位五位の橋とらきのは春日の社内あり

西行撥集抄

まほむけけしき二めとの塔のありさぬるせいの橋は足もとら

にふみらん

神垣の森は袿戸のわよありまふの森は下三條町南側よあり

神功皇后三韓退治の時住吉大明神を大将と定め八百万の神達を

あつめまふのむねに名あり 地獄谷ハ神垣の森のわよあり

沙石集よつふ解脫上人の弟子僧都璋系とて碩学の人あり入寂乃

のちあり女の身よつきて種くろくの中ハ我大明神のい方便よりいみきハ

いなりはま使遣しんものいぬといふ。涼重のつとめとも他方の地獄に
落しき春日や下に地獄をかまはまはあつめ入洒水をそき經陀羅尼
かきつせ助けるとあり下畧

まふ谷 鋌塚ハ東大寺草創の時良弁と法力を争ひつる辛玉行者乃
鋌を仰しそき東大寺よあやみあれハ必ずす唱動すとてや

雲井坂とらきの橋のわよあり

むし雨のそれをたこよ雲井坂三笠の山はるきとも 為重

若草山三笠山のわよ並いしる山あり 末本集

今も移つたまやこもれり春日やあつさ山は雪の音 中智親王

横沃の池々天竺の狛猴池をうつしてけ者あり

大和物語は昔奈良の山門は仕まつる来女あり魚かちいみしきや
よてくくよひりれともあはさるり其あはぬ心々帝をかきりあてめよ
かのまぢんおひまかり帝めてるぬのちみもめきりりんハかきり心
とおもひりあ益心よかしておほくひつてきくおほくひりり中畧 せり
へまき心地りれハおみそらにゆてさるはの池は身をなけりりかきなけ

つゝも帝々えちり〜めさるる〜をつてありて人養〜れなき〜めし
る〜い〜あられう〜い〜池のほとりはおゆ〜い〜い〜人〜
〜よませのふ〜ゆ〜い〜

りきよ子つ福く〜れ髪をさる〜池の玉葉と〜をさる〜
とよめる附門

さる池の池もつらり〜り〜玉葉かつく水そひま〜
とよめるひらけ地は墓せせせぬひ〜かん論〜せお〜い〜
名りや池をめぐり〜おもす〜

白氏文集東林寺白蓮詩

夜深フケテ哀僧イテテイテ獨起ヒトリオキテソクテテ繞池ソクテ行

廣沃の月又今の世ももて遊ふと〜人ま〜あつ〜あつ〜あつ〜あつ〜
よきま〜て月かけ水〜う〜い〜人〜い〜い〜い〜い〜い〜
水の上へ杖をうけ〜浮草のち〜と返き〜附月水〜う〜い〜
〜さ草をかきか〜れハ水の月〜あ〜い〜い〜い〜
とよめる〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

い〜この心々〜い〜お〜い〜い〜定家家隆も親遊も遊下も

とよめる〜い〜ハ宗祇の懐心をか〜い〜い〜い〜い〜い〜
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

親遊達ノ定家家隆もあ〜い〜い〜い〜い〜い〜

衣かけ柳良辨夜泣の地蔵文使の地蔵元貞ちの鐘と鬼の爪の痕はな
れ十三鐘と七つと六つと五つと四つと三つと二つと一つと

衣かけ柳と目ありあり糸女のめをさる〜附衣を柳はかけ〜い〜
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

文つゝい〜の地蔵とたが舟行障の女身ま〜い〜のちけ地蔵をい〜
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
元貞寺乃鐘 本朝文釋

道場法仲と尾張阿音郡の人なり姓名をさ〜い〜相傳て〜敏達天皇
の附尾張は農父ある月田は水を入り附天より雷降るは雨を

樹下ニサケ^{サス}節をさして立ちし雷俄ニあり落つ形作小兒の如ク一節をあげてこんとす雷夫^{サス}かゝりて曰吾を害するものぞれ吾等^{サス}恩を報^{サス}し汝を以て異魂を生せめん^{サス}と云ふ其のそむ取あり吾為^{サス}一ツの椽^{サス}障^{サス}舟をつら共申^{サス}水をより^{サス}流る^{サス}は弁素をもつて一吾^{サス}あ^{サス}よ^{サス}ま^{サス}則^{サス}雷のいづ^{サス}如くする^{サス}雷^{サス}形を^{サス}は^{サス}て須臾^{サス}天^{サス}に^{サス}の^{サス}る^{サス}有^{サス}る^{サス}影^{サス}月^{サス}にて夫の妻好^{サス}る^{サス}胡^{サス}なる^{サス}男子^{サス}を生^{サス}む^{サス}共^{サス}伴^{サス}勢^{サス}さ^{サス}つ^{サス}る^{サス}靈^{サス}蛇^{サス}魄^{サス}の頭^{サス}に^{サス}ま^{サス}い^{サス}ひ^{サス}め^{サス}る^{サス}二^{サス}首^{サス}尾^{サス}お^{サス}至^{サス}り^{サス}て^{サス}あ^{サス}は^{サス}せ^{サス}ま^{サス}り^{サス}又^{サス}を^{サス}是^{サス}を^{サス}あ^{サス}や^{サス}り^{サス}童子^{サス}歳^{サス}十^{サス}有^{サス}余^{サス}と^{サス}て^{サス}勝^{サス}力^{サス}あ^{サス}り^{サス}す^{サス}方^{サス}八^{サス}尺^{サス}の^{サス}石^{サス}を^{サス}あ^{サス}け^{サス}て^{サス}投^{サス}する^{サス}お^{サス}お^{サス}且^{サス}石^{サス}投^{サス}る^{サス}は^{サス}乃^{サス}て^{サス}ち^{サス}ち^{サス}を^{サス}な^{サス}り^{サス}足^{サス}跡^{サス}地^{サス}は^{サス}入^{サス}る^{サス}三^{サス}四^{サス}斗^{サス}童子^{サス}元^{サス}無^{サス}寺^{サス}の^{サス}僧^{サス}と^{サス}作^{サス}り^{サス}仕^{サス}ふ^{サス}時^{サス}の^{サス}鐘^{サス}樓^{サス}は^{サス}鬼^{サス}あり^{サス}て^{サス}毎^{サス}夜^{サス}こ^{サス}も^{サス}つ^{サス}く^{サス}もの^{サス}を^{サス}釣^{サス}り^{サス}童子^{サス}を^{サス}僧^{サス}と^{サス}ま^{サス}み^{サス}て^{サス}請^{サス}ふ^{サス}く^{サス}鬼^{サス}の^{サス}人^{サス}を^{サス}こ^{サス}ら^{サス}ひ^{サス}る^{サス}を^{サス}止^{サス}んと^{サス}云^{サス}僧^{サス}も^{サス}い^{サス}ふ^{サス}共^{サス}お^{サス}童子^{サス}堂^{サス}の^{サス}わ^{サス}り^{サス}て^{サス}鐘^{サス}を^{サス}つ^{サス}く^{サス}い^{サス}き^{サス}お^{サス}下^{サス}に^{サス}及^{サス}ぶ^{サス}に^{サス}鬼^{サス}来^{サス}り^{サス}て^{サス}形^{サス}を^{サス}あ^{サス}ら^{サス}ひ^{サス}童子^{サス}則^{サス}ち^{サス}鬼^{サス}の^{サス}頭^{サス}を^{サス}搦^{サス}み^{サス}鬼^{サス}と^{サス}童子^{サス}と^{サス}力^{サス}を^{サス}争^{サス}ふ^{サス}て^{サス}お^{サス}り^{サス}り^{サス}鬼^{サス}を^{サス}引^{サス}て^{サス}外^{サス}に^{サス}ゆ^{サス}くと^{サス}歎^{サス}き^{サス}童子^{サス}は^{サス}引^{サス}て^{サス}内^{サス}に^{サス}ゆ^{サス}くと^{サス}お^{サス}め^{サス}に^{サス}及^{サス}ん^{サス}て^{サス}鬼^{サス}も^{サス}つ^{サス}れ^{サス}の^{サス}う^{サス}れ^{サス}と^{サス}ん^{サス}と^{サス}童子^{サス}志^{サス}す^{サス}

鬼の髪を捲^{サス}る^{サス}鬼の髪^{サス}剃^{サス}る^{サス}は^{サス}内^{サス}付^{サス}る^{サス}鬼^{サス}剃^{サス}の^{サス}し^{サス}と^{サス}い^{サス}ふ^{サス}地^{サス}を^{サス}ん^{サス}た^{サス}血^{サス}あり^{サス}跡^{サス}を^{サス}尋^{サス}に^{サス}寺^{サス}辺^{サス}の^{サス}陌^{サス}上^{サス}に^{サス}ゆ^{サス}り^{サス}止^{サス}り^{サス}是^{サス}を^{サス}搦^{サス}す^{サス}に^{サス}寺^{サス}あり^{サス}む^{サス}か^{サス}惡^{サス}奴^{サス}と^{サス}埋^{サス}む^{サス}あり^{サス}と^{サス}即^{サス}ち^{サス}惡^{サス}奴^{サス}の^{サス}鬼^{サス}と^{サス}い^{サス}ふ^{サス}を^{サス}そ^{サス}ら^{サス}り^{サス}て^{サス}鬼^{サス}の^{サス}髪^{サス}ひ^{サス}つ^{サス}る^{サス}は^{サス}乃^{サス}ち^{サス}鬼^{サス}の^{サス}髪^{サス}を^{サス}元^{サス}無^{サス}寺^{サス}乃^{サス}ち^{サス}宝^{サス}蔵^{サス}にお^{サス}ま^{サス}む^{サス}童子^{サス}傳^{サス}は^{サス}り^{サス}て^{サス}通^{サス}坊^{サス}法^{サス}作^{サス}と^{サス}い^{サス}ふ

続紀^{サス}靈^{サス}龜^{サス}元年^{サス}五月^{サス}始^{サス}て^{サス}元^{サス}無^{サス}寺^{サス}を^{サス}左^{サス}京^{サス}六^{サス}條^{サス}四^{サス}坊^{サス}に^{サス}建^{サス}一^{サス}方^{サス}矣^{サス} 元^{サス}無^{サス}寺^{サス}傳^{サス}歌^{サス}

紀^{サス}寺^{サス}々^{サス}紀^{サス}あり^{サス}の^{サス}あり^{サス}般^{サス}麻^{サス}寺^{サス}々^{サス}聖^{サス}武^{サス}帝^{サス}の^{サス}所^{サス}建^{サス}立^{サス}り^{サス}て^{サス}勅^{サス}書^{サス}の^{サス}大^{サス}般^{サス}麻^{サス}寺^{サス}地^{サス}底^{サス}に^{サス}納^{サス}め^{サス}十^{サス}二^{サス}重^{サス}の^{サス}塔^{サス}と^{サス}立^{サス}た^{サス}り^{サス}り^{サス}般^{サス}麻^{サス}寺^{サス}と^{サス}い^{サス}ふ^{サス}物^{サス}は^{サス}大^{サス}塔^{サス}宮^{サス}の^{サス}か^{サス}た^{サス}か^{サス}く^{サス}さ^{サス}せ^{サス}ぬ^{サス}ひ^{サス}て^{サス}危^{サス}難^{サス}を^{サス}の^{サス}り^{サス}ぬ^{サス}ひ^{サス}り^{サス}大^{サス}般^{サス}麻^{サス}寺^{サス}の^{サス}唐^{サス}櫃^{サス}あり^{サス}寺^{サス}内^{サス}に^{サス}右^{サス}代^{サス}造^{サス}立^{サス}の^{サス}石^{サス}と^{サス}り^{サス}り^{サス}般^{サス}麻^{サス}寺^{サス}形^{サス}と^{サス}い^{サス}ふ

何^{サス}の^{サス}坊^{サス}と^{サス}い^{サス}ふ^{サス}源^{サス}の^{サス}よ^{サス}り^{サス}の^{サス}都^{サス}を^{サス}落^{サス}し^{サス}て^{サス}周^{サス}防^{サス}は^{サス}業^{サス}聖^{サス}佛^{サス}と^{サス}い^{サス}ふ^{サス}傳^{サス}日^{サス}比^{サス}作^{サス}槽^{サス}の^{サス}よ^{サス}り^{サス}み^{サス}あり^{サス}と^{サス}志^{サス}す^{サス}其^{サス}坊^{サス}か^{サス}く^{サス}甚^{サス}後^{サス}更^{サス}加^{サス}り^{サス}り^{サス}り^{サス}

重^{サス}街^{サス}々^{サス}治^{サス}承^{サス}二^{サス}院^{サス}松^{サス}永^{サス}り^{サス}永^{サス}福^{サス}と^{サス}て^{サス}後^{サス}永^{サス}坊^{サス}の^{サス}跡^{サス}を^{サス}あ^{サス}む^{サス}て^{サス}龍^{サス}松^{サス}院^{サス}々^{サス}別^{サス}を^{サス}お

の奥の軒を伊勢の所の眺めをうし柳原元紅の碑を銀色あるのきりといふ

平家ものかきりたるは出上りといふ
お軍はなして大將軍の中将ちけひし殿もあつてつちあはきりといふ
つちあはきり出せしものゆゑにそのまの住人福井の庄の下の治部をまよひた
つ者櫓をとりて炬燵にて在るあまをかくつたは比々十二月廿八日の夜に
成の刻半のまじりハあまは風をさけつたはひびくはなれりといふ
よふ風はまよひかきりかけしは死をおひなすも情むかひの者は
奈良ぬき付死し殿もあまはしるし行歩も叶へる者ハ吉を十は川に
言ハぬけりあまはぬき老僧やちあまはまやち者ちあま女もあま
たりりあまはまよひと大佛殿の二階の上山階寺の内へあまはまよひ
極つたはまよひあまはかきりあめまよひあまはまよひあまはまよひ
かの所のこの置人もまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ
あまは累代の寺へ東金堂はありまよひ佛法最初の釈迦の像をまよひ
よおまよひまよひあまはまよひの観世音をまよひまよひまよひまよひまよひ
一階の廊をまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ

盛衰記 十四

平の重ひし南都とせめて真福寺焼亡の時あまはまよひまよひまよひまよひまよひ
申のまよひまよひの神とまよひ城の神をいふまよひまよひまよひまよひまよひ
大まよひまよひの本あり焼亡の時火は樹のまよひまよひまよひまよひまよひ
まよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ
まよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ
まよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ
まよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ
まよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ
まよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ
まよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ

隆徳大平記 四十一

三好元京ちま義詰永祿十年四月六日ね水久秀とたむ泉別堀を
出て和嘉信貴の城へ入彼地より城品へちまをいふ焼働き
ま門の城へ入りしを三好三人を跡を追おしや南都は陳
をみて毎日今義をいふみり日十月十日諸勢ま門の城へ出て
三人をの追ふま東ちまお討をかけ鎗中村新をいふを始め

あまこころしつらひに附不為よる地の王其まひつり大よめく
 大佛ぬまはめをぬ玉閣一朝のまのつの中よ焦ちるう。
 僧舎坊重源上人姓々紀氏滝口左る允季重の三男刑部左衛門尉
 て仁安二年宋よりの河原漢を御し明けりて舍利の瑞光を見
 年をなす御朝し其谷の源空上人のまをなす其後東大寺再建
 の勅進しめまらり

周防公の不府の皇よ首大佛取造まの附僧舎坊當よ良枝を
 とめ附の塔室の火をなすといのりり九に有るまの今よある也

海門蔵相院公慶々歳サ皇よ備りて大佛を起し大佛取再建
 大勅進して貞享のはよりて大佛ぬま御し傳記界に

伊智の他 伊智らいせ物後の他者寛平治皇よる也つて
 伊智親王をまじりる傳りるは源氏物語大知ものかろるまのいせ
 のゆくの女ゆつて心なす

伊智まのかろるのはめむか男のあつてあつてをあ良の京春の
 里よあるまのあつてあつてあつてあつて南都の賤よる

紹巴 松村氏 号 宝珠庵 臨江齋 奈良生

けめ周桂門人後里村昌休門人昌休早世昌也幼年して紹巴
 後見より依て里村氏に改慶長七年没

紹巴法眼奈良の京春日の里よむすれをこちよ近きころけまより周
 桂法作とも連歌よ長せ。人下向ありに道よおひ入心つき
 作よ近つき十九本家におひよりてかろる名を紹巴とつけられよ一
 とを平めてもき別となす。のち文昌休門才と成て登り日のつておの
 つき心をかけられよまのりて山よけ山よまのりつはの道よかつけ
 アキ又よちれは十四支の三を霜月けめの五日よまのり別よあつきなり
 を法眼めくよかろる。こと山よもまのり海よりも深しといふつき年月
 をよをたてかろる。いとをといひつ。つよひををまのりよいよ
 より風よあつてれ傳りつ。つよをこりさなす。みさいつこちよりよあや
 ーくまのりまのりよまのりよまのりよまのりよまのりよまのりよ
 年よ九あまのり月十二日まのり。泉よまのりよまのりよまのりよまのりよ
 まのりよまのりよまのりよまのりよまのりよまのりよまのりよまのりよ

を二返せせよかゝるもろくさうとやいさむるとやに泪もなほしそなかり
しつゝおろろるゝは百のおとひをのく侍るものなり

ふとさひなれもやまあゝるころも 昌叱
せらみきりのみりーおの空工

むかおもみ松の月よかゝふきさ
福登の産々々々 新風のそと
くれぬの森や新編は侍るも〜ん

秀方のまうきの 海あろ 影
りくりの声かめろは 山近と
こけ入るゝまくろ下通

下果

華原磬 泗濱石 蘭奢待の伽羅鴨の毛乃屏風 柳生家の劔術室 菟院
乃十文字 法花寺乃作り大西大寺の豊心丹 法諱味噌力 鑿頭
奈良漬 奈良酒 奈良金剛 奈良金麻 墨 世は名きくろち
箱中 終ひまより 起る 岩井 具足 文珠 物 膠 緑青 鞞 鞞乃皮

土風呂 仄ゆるろく 櫛木練

白氏文集

華原磬 華原磬 古人不聽 今人聴 泗濱石 泗濱石 今
人不撃 古人撃 今人古人 何不同 用之捨之 由樂工

故老曰 泗濱石 下調之 不能和 得華原磬 考之乃
和由是 不改

系春待々 聖武帝の時 異ふより 治りし 名も也 將軍家 天下草創
の時 ありを少し 伐ぬふ 例なり 足利尊氏 公一寸 伐ぬふ 織田信長 公
ハ一寸 八分 伐ぬふ 慶長七年 六月 是を伐ぬふ け香切ぬと 又おと
の如く 成てさし 滅せしと っや

鴨の毛の屏風 八東大寺 供養の時 唐土より 取りし 大屏風也 當寺より 法花
寺 其百十五 町 光明 皇后 奉詣の時 左右 是を引つけしと なり
柳生の劔術 八元 和年中 菅原の宗頼より 劔術を 練行ぬ 此の 系を
起し 名を 領地し ぬふ 柳生村と ぬふ

法花寺の作り 大々 法花寺 村あり 律宗より 尼の 系を ちと 往來 法

海の旧宅ありしを光明皇后寺に草創し、今聖武帝東大寺を以て造営
す、内陳、女房を詣させありし、后も此寺を建立し、あひ男
を詣させありし、今郷の尾公に任職し、あひ壻をもちてあひ
さきさき藤太をつくり、賣たり、婦人養草云々

大の子、大の形、さきさき藤太、産衣をまつけ、おに
きせ初て其後子よきする、後の内へ守り、れ又とくふや、月ある白粉
を産、又眉掃き入る、こい、奈良の法花と、いふ尾、ち、う、ゆ、こ

豊心丹々西大寺の坊中、あ、く、道、五、律、律、あ、ろ、こ、より、方、を、傳、て、来
り、れ、い、と、一、詠、い、ふ、島、山、某、唐、王、より、方、を、も、と、め、和、方、と、せ、ら、れ、い、う、西、大
寺、の、大、元、軍、場、の、心、の、働、き、あ、り、い、賞、と、て、豊、心、丹、の、方、は、三、百、石、を、く、て

寄附せられ、い、も、又、い、ふ、興、正、菩、薩、殿、尊、の、南、都、西、大、寺、に、住、す、諸、人
の、疾、ひ、を、す、く、い、ん、為、豊、心、丹、を、い、て、せ、は、傳、ふ、後、世、い、く、く、は、藥、法、の
傳、を、失、り、る、を、お、れ、オホクニニトウ巨、敵、の、筒、の、うち、こ、え、う、射、て、コクヤク一、筒、今、泉
加、塚、西、本、願、寺、に、あ、り

法論味、コクヤク護、令、傳、正、の、製、化、り、入、る、ま、じ、ま、や、味、味、と、い、ふ、は、

飛鳥川の不とりなれハ此を味唱ともいふ著中、宋曰式部、たま敦光
朝臣のものと、奈良なり、傳の飛鳥味唱といふものをもちて、来
り、に、いつ、の、か、と、の、り、と、と、わ、ひ、り、れ、ハ、傳、か、く、た、ん

まのふせ、う、り、あ、も、て、あ、る、飛、鳥、味、唱
み、の、あ、を、や、る、て、来、つ、む

と敦光朝臣の付くり

カ、饒、頭、ハ、地、淵、宗、二、ら、と、中、辛、の、産、り、て、宋、の、林、和、靖、の、裔、と、て、林
渾、と、い、ふ、曆、應、四、年、に、建、仁、寺、の、龍、山、禪、師、宋、より、歸、朝、の、時、あ、ら、ふ、て、日
本、より、姓、を、地、淵、と、改、む、始、南、都、に、住、し、ま、ん、ち、う、を、製、し、て、高、々、奈、良
ま、ん、ち、う、の、け、め、也、其、子、宗、二、連、歌、を、好、む、て、源、氏、後、柿、を、あ、む、名、つ、け、り、
林、近、柿、と、い、ふ、こ、れ、を、せ、は、饒、頭、を、名、と、い、ふ

鬼つ、七、車、南、都、加、井、氏、に、送、る、詞

雲、々、平、聖、の、教、を、と、こ、し、る、は、傳、へ、あ、る、ハ、子、里、の、外、人、の、心、を、か、よ
け、あ、る、ハ、四、季、を、あ、く、の、詞、の、花、乃、中、立、と、い、な、れ、り、あ、り、加、井、氏、の、
功、を、貴、く、其、徳、を、感、へ、今、製、家、の、お、ろ、そ、う、は、な、り、り、る、を、な、け、き

て遠く橘の京の昔乃自ひをおこし紀貫之の梅の芽をさるひて
く詩歌連俳の句をよむとめものしるま中よりハ伊勢の梅
の詠の句をとりてつよの

花とそををらぬ水子石乃雲 鬼つ

朝皮ハ皮草草の三ある皮ハ毛を去るをいふも皮ハ草ハ毛を去
て皮の層のみめしつよをいふは是をなめかハとつよ草ハなめ
皮のみめしつよをいふは是をお皮といふやうつよに
いふ草ハ土風を操こ移つていふは解なる

本練をもつて 柳 湖春

奈良茶々ヤクウと名つけ益食を硯水といふ油煙取五合祿豆を
の石榘多村の木格子赤きものハ頭登の赤飯よるとく疲る人ハ金堂の
缸赤といふ木辻の待宵鳴川の別情ハ万金をつとておもひよ一人下を
懐くすハ七口景ハ八景町ハ門の名めて五条三条の巻をこつる
冬の朝起春秋のなつとハ諸屋よすれ諸人よこころ是皆旧都のあり
き遺風なる

奈良茶 七代孫の常語に奈良茶三石の味をえと飯席
なごヤクウハ奈良茶三石ハ介我々物多質素なるをいふる
奈良茶といふハ今の茶粥のり也むハ南都大佛殿建立乃
河近風の民皆力をつとて又ま食を兼粥して其余のあり
しるを寄進しとありたとく三石の粥ハ飯十石の目をさる
といふ心あり世俗けんやのるを奈良茶三石といふる
ヤクウハ茗粥として茶粥と同硯水ハ

お梅ヤクウハ 切燈基のかけの中 飲 正章

建水のやうなるものを引そハ食 長頭丸 政信

奈良のまは 朝夕ハ茶粥をいふ益ハ飯をいふ是を
とある人いふハ我曰奈良の寺ハ往古ハ厨あり外より飯を炊て僧徒
一人別日配りあたしなり朝夕茶粥の遺風其趣あり
乞手坂ハ子坊坂といふ段有寺町の南ハ往還石あり往來の人其に
腰をかぐる時ハ其徒入ると南都傾城町ハ木辻鳴川といひて笠接

にあつて七の八景なりハ奈良表所記よりまゝ果は
真福寺に毎月晦日講といふるあり小僧其心願の實をくらむむ
よめは左僧あつても雑戯をまひあひハ口をもちめんとて小僧
をいぢり時々衣を剥て罪はとまり

氏神ハ多氏ハ春日大神源氏ハ八幡宮其神の苗裔にあつても人
氏神といふ一々今佳所の銘をを氏神といふ其由ををまひ
元暦元年二月七日平のあけひ源氏の高は唐らる五年ハ大佛
殿をやく傍を以て南都の小路を引返す時源空上人は謁せ
るを源空往て戒をさつて松かけの硯と鏡とを布施とひのち
大佛を流す時彼鏡を炉中になげむ死して鏡化ひつゝあり
正西のぼらよお付てあそ人とちて奇異といふ是も松永の火
よかして焼きあり

冬々後奈良のむひて新築の形 宗祇
菊のよつや奈良より ちよ佛一達 翁
奈良より人よ別る時

二侯よ別をそめり 麻乃角

木辻にとまう

門立の袂くハや 小麻 う子 具角
番の火をたよりめや 廉の取 探志

奈良の万僧供養に詣て山をりよ一おをゆ
りてぬて主よまひさ料足もなれハ枕元の
かかみよ多あたまをたてのくれ心傳り

み、おや木傳もなまてこまけり 唯然
奈良ををせり

茶のむね中に城あり 郡山 許六
大和のや新々奈良茶を花 壺
むか、めく奈良の伝承や 菊 花
祈り味香をくらぬ奈良茶の空、のふ
八重桜 まよるつる奈良茶の形 法圃
菊のよもや奈良らつく代の男あり 翁

菊よめて奈良と難波ハ音日振
くも風や人声うつ三三三山
今つく日秋乃夜結を春日山 其角
牟乃新の能乃ありとほし
後の月寺ハ奈良茶のけりめ外 立波
南都殺あきくそ
子ぬこもる 花や殺あきの春のる 去来

鎌倉賦 并序

許六

夫相模^{かまろ}ハ郡の名^なりて大職冠鎌子丸の時靈^{レイ}爰^{こゝ}よつて鎌を
埋むの地也^{こゝ}故^{ゆゑ}郡の名^なと^{して}深谷の時忠惣退補使^{しん}として文武の御
宇^うより聖武の神龜^{かめ}年中^{なかつ}迄^{まで}居^いる夫^おより上總介平直方^{へいぢかた}是^{こゝ}よ住^す
て八幡太郎義家朝^{あそ}に^{より}源氏代々^{げんじ}居^い住^すの地^ちなり賦^ふして曰^い

和名抄 鎌倉郡 かまろ 郷^{ちやう} 方^{かた} 八
たきこもるかまろ山^{やま}のこもるきをまつとまいつくこひつやあそむ

旧記曰録^{きやく}是^{こゝ}ハ常陸^{ひろは}玉麻呂^{たまろ}郡^{ごほ}の人^{ひと}也^{なり}推古^{すいこ}天皇^{てんかう}二十三年^{にじゅうさんねん}甲戌^{かつか}誕生
大車^{おほくるま}氏^{うぢ}なりおと^とお取^とおつ^つま^まり^りよ^よに^より^りて^て麻呂^{まろ}系^{けい}信^{のぶ}の^の相^{あひま}模^もの^の由^{よし}井^い郷^{ちやう}や^やと^とあ^あひ^ひる^るお^お靈^{レイ}爰^{こゝ}を^を感^かん^んし^し奉^{ほう}未^みお^お持^{もち}の^のい^いる^る鎌^{かま}を^を
今^{いま}の大^{おほ}鹿^かの^の松^{まつ}丘^{かみ}は^は埋^うめ^めの^のい^いる^るよりかまろ郡^{ごほ}といふ^いふ^ふと^と也^{なり}
藤原^{ふじわら}太郎^{たろう}時忠^{ときちゆう}ハ聖武^{せいぶ}帝^{てい}の^の内^{うち}子^こ冥^{めい}八^{はつ}咫^ぢ惣^{そう}退^{たい}補^ほ使^し大^{だい}職^{しやく}冠^{かん}鎌^{かま}子^こ大^{だい}
乃^のの^の玄^{げん}孫^{そん}時忠^{ときちゆう}鎌^{かま}倉^{くら}住^す一^{いつ}且^{かつ}後^ご平^{へい}将^{しやう}軍^{ぐん}貞^{せい}盛^{せい}の^の嫡^{ちやく}孫^{そん}上^{じやう}總^{そう}介^{けい}直^ぢ方^{かた}
に^に住^すす^す康^{かう}平^{へい}六^{ろく}年^{ねん}源^{げん}頼^{らい}義^ぎ清^{せい}因^{いん}八^{はつ}幡^{ばん}宮^{みや}を^を建^た立^たす^すけ^け比^ひより^{より}源^{げん}氏^し代^{だい}の^の
居^い住^すの^の地^ちと^とか^かみ^みろ^ろ源^{げん}氏^し一^{いつ}流^{りゆう}志^しと^とく^くり^りく^く也^{なり}
三代^{さんだい}の^の将^{しやう}軍^{ぐん}九^く代^{だい}乃^の執^{しやく}權^{けん}春^{はる}の^の花^{はな}咲^さけ^けハ^ハ秋^{あき}の^の紅^{こう}系^{けい}と^と交^{かう}す^す柳^{りゆう}の^の都^とも^もろ^ろこ^この^の里^り
爲^{なり}、丘^{かみ}雲^{ぐも}井^いの^の嶺^{りやう}下^かの^の宮^{みや}ハ^ハ頼^{らい}義^ぎ清^{せい}の^の建^た立^たす^すて^て上^{じやう}の^の宮^{みや}ハ^ハ源^{げん}二^に位^いの^の
執^{しやく}請^{せい}之^の實^{じつ}柱^{ちゆう}か^かよ^よま^ま立^たて^て民^{たみ}の^の戸^こ煥^{くわん}り^りき^きん^んり

三代^{さんだい}将^{しやう}軍^{ぐん}ハ^ハ清^{せい}和^わ天^{てん}皇^{かう}十^{じゅう}代^{だい}左^さ馬^ば頭^{かう}義^ぎ朝^{てう}三^{さん}男^{なん}正^{せい}二^に位^い控^{くわう}大^{だい}納^{なつ}言^{げん}頼^{らい}朝^{てう}頼^{らい}家^か
實^{じつ}朝^{てう}三^{さん}代^{だい}征^{せい}夷^い大^{だい}将^{しやう}軍^{ぐん}ニ^に任^{にん}九^く代^{だい}ハ^ハ北^{きた}条^{じやう}時^じ致^ぢより高^{かう}時^じ入^{にゅう}道^{だう}ニ^に至^{いた}り^りて^て七^{しち}ふ
時^じ致^ぢハ^ハ其^{その}祖^そ肥^ひ前^{ぜん}寺^じ平^{へい}維^い時^じより出^いて^て其^{その}孫^{そん}左^さ爲^ゐ直^ぢ方^{かた}其^{その}子^こ四^し郎^{らう}友^{ゆう}丈^{ぢやう}
附^つ家^か其^{その}婿^{よめ}子^こ也^{なり}今^{いま}附^つ系^{けい}次^じ男^{なん}四^し郎^{らう}附^つ致^ぢ頼^{らい}朝^{てう}ニ^に在^あり^り世^よハ^ハ附^つ致^ぢ受^{じゆ}領^{りやう}乃^の

世沙汰より四郎までさしおれり君薨去の後正治二年二月遠江守に任
深平盛衰記 廿八

頼朝運を東海よりひききこへく天下をよにもるるおの靈をたけり乃
語相云くあり八幡大菩薩の心利まらる都へのなるるのいふやすく大
菩薩を幼傳いしなり。一とて萬書を造賞して靈神をいふひま。社壇こそ
をちりてめたるゆはいさこそいへり。朱の玉垣てりまのみるの松風がけ
すさみ系祀四時よおこし神女日おる再おせり

宗祇歌馬記

宗長化

文永のけりぬの年六月の末段河玉より一歩をすめ足柄山を越して不二
の根をや。是て伊豆の海沖の小島よる浪のこゆるきの波をくひ録倉を
一見せり。衣大将家のそのこゝ又九代の榮もく眼のあつ心地してつ
つ丘の松雪の下の葉をり実よ石清水よ立まきくんとそおほく傳ひし
けすまひ谷くのくまきいそまの海の底もえをつつ。まよ八九年のけ
か山の内庭の谷の鈴櫓のりてきて凡八九のこよこよ分れてたゆく人よ
たやすけり。とてこゝかまこつてみてむさし。たをるるて下界

とてこゝかまこつてみてむさし。たをるるて下界 平泰時

鎌倉志は柳系ハ八幡宮舞殿の辺より東薬師堂あ迄をいふむ
柳多かりしとてかまこつてを柳の都といふ

鴨長明の法東紀より

作相摸小鎌倉郡ハ下界のろくやをん天朝の築温筋ハ武將の林を
寸万葉の花方よひけ勇士のたよ榮より百歩の柳百よひ中りらる
月よ似る一張まはとちて胸とさふ。一劔ハ秋の霜の如く之天よ
勝す。一ト界

江之崎ハ三韓賊天三浦三寄ハ杜戸の明神あり合ふ京と相摸入道ハ關大の
地由井ハ淡々下河辺の庄司ハ笠掛を射初る小袋坂稻村ハ寄七里。後月
かけの谷ハ唇をつくり扇の谷ハ佐舟の紋の畔ハ腰鼓の寺ハ兵慶ハヤ状
の下書を跡ハ兒ハ潤ハ志ハ菊ハ最後ハ歌をよむ

相州江の崎年支天ハ杖素三韓支天のひとつたり。源記什物なま
ハ鎌倉志より

三浦郡三寄郷ハ相州の寄豆別房筋のりるよ西州の寄ハ對江

寺に宛あるより、往古々出あするのみならず、亦奈良の薬師寺に
一の觀音寺下地の薬師寺より、日中にてその戒壇あり、一年又一万の心
究大政治家の度牒をばりて、之をばりて受戒をばりて、之をばりて出家の心
き、あつみの寺に入て、宛りて學文する也、度牒をばりて、若出あする
され傳教弘法の方所、出あするなり、ハ寺に入て、學文あり、出あする
度牒をばりて、之をばりて受戒をばりて、之をばりて

みあする 出あするとおりの末坐の頂の舞 友仙
才四 大宛より才小ちび 才一 才一

に瀬川は、宗尊親王の影をうつし、清川は、青砥の錢をばりて日蓮盛之
首の坐景清か、いと、條の跡大塔のまら、條の跡、之をばりて、み實朝より、公曉、
為、之、蹴せ、勝長壽院より、之、の、禱、之、を、ばりて、法、堂、より、頼、於、の、墳、墓、
を、さ、り、つ、つ

中務實宗より、侍り、ハ、後、臺、院、の、皇子、よ、て、か、ま、つ、つ、の、將軍、より、
お、り、つ、つ、に、つ、つ、の、ま、あ、き、と、て、ま、ま、つ、つ、の、ま、あ、き、と、つ、つ、
此、方、の、上、よ、り、つ、つ、の、ま、あ、き、と、つ、つ、の、ま、あ、き、と、つ、つ、

て、つ、つ、の、ま、あ、き、と、つ、つ、

文永元年、宗尊親王、十宗、時、宗、と、傳、り、て、か、ま、つ、つ、中、和、を、つ、つ、の、依、り、

將軍、女、房、の、こ、り、よ、め、き、つ、つ、の、ま、あ、き、と、つ、つ、の、ま、あ、き、と、つ、つ、
か、ま、つ、つ、の、ま、あ、き、と、つ、つ、の、ま、あ、き、と、つ、つ、

青砥、山、の、つ、つ、ハ、水、源、時、頼、の、所、也、ま、あ、き、と、つ、つ、の、ま、あ、き、と、つ、つ、
り、つ、つ、の、ま、あ、き、と、つ、つ、の、ま、あ、き、と、つ、つ、
十、部、進、郷、兼、久、の、つ、つ、ハ、宗、法、の、ま、あ、き、と、つ、つ、
砥、の、庄、を、つ、つ、の、ま、あ、き、と、つ、つ、

日蓮、の、首、の、坐、 龍、口、の、其、古、跡、よ、り、ま、あ、き、と、つ、つ、
盛、え、ら、平、家、の、侍、至、馬、判、官、を、 謠、曲、は、清、水、觀、音、利、生、の、り、あ、り、
景、清、は、つ、つ、平、家、の、侍、也、其、術、と、つ、つ、唐、系、を、つ、つ、
其、卒、の、跡、を、つ、つ、の、ま、あ、き、と、つ、つ、

兼、久、元、年、正、月、廿、七、日、實、朝、を、つ、つ、の、丘、に、諸、神、を、つ、つ、
出、の、附、列、當、公、曉、女、の、弟、女、を、つ、つ、實、朝、を、つ、つ、

羊癸丑七月二十日賜公牒一通從為相復其本邑為相後任鎌倉

早藤ヶ谷菟華藤ヶ谷丘墳墓猶存ス

鴨長明海通化 鴨社氏人菊太夫長明入道法名蓮胤

白狐の海の中の葉の宗素出栖の佐士あり性急は底なるのハ能く

ひろひ葉をくくはぬまのくくは運をたすうるのハむくひを能

合をたかうてくくはみをかきぬるのくくはくくは泉の根葉を

りてをくくはよせ力なき音をのくくはむくくは空射谷の埋木とく

意樹花とくくは惜くぬ命なきのくくはけりて投の園と鴨の底は海

重衛と大政入道清盛未男本三位中將須テの張よいけりて録

倉よおむくくは海を張化よあり

俊基 右の韓元徳二年五月後醍醐帝出あんのくくはあり

冥東の百傳とくくはありけりて日記あり記行あり

つりく草

かまうくのあはつをといよまはけさくひまきくくはくくはくくは

もてなれものありまかまうくのあはつをといよまはけさくひまき

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

魚の字をくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

正月初鯉
鎌倉八幡宮
神供

三河魚

又 駿の魚

り

古より
圖



文相修
圖

持く魚

三河魚

り

又 駿の魚

り

不知何者



り

かまろくをせしむるいんらつね魚

苔磨砂海老葉胡すして魚鱗の類あまかつきいぬあはれを御お
しおろくかよふぬ日の一者めりの地産の武相の境として六浦令伝む
さしりの地なる浪戸の所神の四橋一境の眼をさき能見堂より八景慈詠
の詩をるる照子のね字於ね令江文庫とつよ々祿名寺よりて今々海
文珠像普賢像黒梅西湖梅青葉の影葉より西湖さうの二梅とてむ
大きなもの頼朝乃かろるるなご度さあらかまろく乃海通は地さ今の戸塚ハ
いすしの浅木町といひ大坂の宿をた女町乃浅流ありさりと東南は海さく西
わよ山つらねり境地狭くしてまた谷く乃号ありむねの繁花繁葉をそろ
んせは伝そ今乃養平不昂乃浪戸よりんぬ

魚鱗のちるるいんらつね 山家集

申すはしるる物とあまかつきいぬあはれを御お
しおろくかよふぬ日の一者めりの地産の武相の境として六浦令伝む
さしりの地なる浪戸の所神の四橋一境の眼をさき能見堂より八景慈詠
の詩をるる照子のね字於ね令江文庫とつよ々祿名寺よりて今々海
文珠像普賢像黒梅西湖梅青葉の影葉より西湖さうの二梅とてむ
大きなもの頼朝乃かろるるなご度さあらかまろく乃海通は地さ今の戸塚ハ
いすしの浅木町といひ大坂の宿をた女町乃浅流ありさりと東南は海さく西
わよ山つらねり境地狭くしてまた谷く乃号ありむねの繁花繁葉をそろ
んせは伝そ今乃養平不昂乃浪戸よりんぬ

とてあまかつきいぬあはれを御お
しおろくかよふぬ日の一者めりの地産の武相の境として六浦令伝む
さしりの地なる浪戸の所神の四橋一境の眼をさき能見堂より八景慈詠
の詩をるる照子のね字於ね令江文庫とつよ々祿名寺よりて今々海
文珠像普賢像黒梅西湖梅青葉の影葉より西湖さうの二梅とてむ
大きなもの頼朝乃かろるるなご度さあらかまろく乃海通は地さ今の戸塚ハ
いすしの浅木町といひ大坂の宿をた女町乃浅流ありさりと東南は海さく西
わよ山つらねり境地狭くしてまた谷く乃号ありむねの繁花繁葉をそろ
んせは伝そ今乃養平不昂乃浪戸よりんぬ



浅黄 可也

快て之奇の序なり

書紀景行卷

六鷹^{ムツカリカケ}浦を 多すきりかけて 蛸^{カムキ}を 喰よつて 奉りき
蛸^{カムキ} 板を 貝 蛸 加らそめて 漬果して 蛸 正字なり
上古いふむきといひをいつの代よりかきくるといふ

暮景集 太田道雅家集

原正元年の冬、後深の役、故もは方も入す、このときか、いふみあき、
る、このとき、いふみあき、故もは方も入す、このときか、いふみあき、
なりあ、いふみあき、なりあ、いふみあき、なりあ、いふみあき、
むい、いふみあき、むい、いふみあき、むい、いふみあき、
つ、いふみあき、つ、いふみあき、つ、いふみあき、
る、いふみあき、る、いふみあき、る、いふみあき、
る、いふみあき、る、いふみあき、る、いふみあき、
ぬ男の色、いふみあき、ぬ男の色、いふみあき、ぬ男の色、

つありれ、いふみあき、つありれ、いふみあき、つありれ、
きに歌ひ、いふみあき、きに歌ひ、いふみあき、
か、いふみあき、か、いふみあき、か、いふみあき、
童頼延

- 鎌倉四境 東六浦 西稻村 南小坪 北山之内
 - 五名水 金巻水 不老井 鏡洗水 日蓮之水 太刀洗水
 - 十井 棟立井 瓶井 甘露井 鉄井 泉井 翁井 底のけ井
 - 石井 星月夜井 六角井
 - 七郷 小坂 小林 葉山 津村 村園 長尾 夫部
 - 七瀬 由比濱 金洗 伏六浦 圓瀬川 柚川 杜戸 江之島
 - 十橋 琵琶橋 筋道橋 歌之橋 裁許橋 針摺橋 瓦堂橋
 - 勝之橋 蓮川橋 丸橋 十王堂橋
- 孫名も、金沢山と、只、其、河、院、の、如、海、其、家、の、細、別、文、席、の

跡之録倉大草紙、武品金沢乃孝校ハ中末九代の繁昌のむかひに、
 北條越後守政時、依り文庫を建て和漢ノ群書をおさめ儒者ヲ
 中佛書ヨリ朱子を押し印文指字ヨリ金沢文庫の四字を以て、
 実東乃公方源成氏乃附上枚憲實、以て諸王大弘、
 一々書籍皆敬慕し、一切匠の切好、
 祿名寺西湖の梅むか、高御、
 大まかぬ、

源平盛衰記 卷廿二

まの依りかゝるを著せり、
 かのうらやむかしの角の蛇牛 貞甫
 この内やあ上杉乃 下すみ 宗周

芳野ノ賦

丈草

昔野を以て皇居の池なり、山川里嶺、
 山乃井花園を詠す、
 類詩連高詔、

天武天皇御製

三芳野の年我の類に附あ、
 雪の時、
 よ一の心花竹、

芳野集 佐川田、

人の心花竹、
 ひこや、
 かくまは、

横井へと皇后御相雲若のおあひまをかけしむとに二おあひまの今もの
もろ金剛力士の二階門のわや天神の社セ十二百の也所二十八面五五
藏王堂一対のくまうとくまうのくまう大平化又又えまうまうのくまう
右開の附諸堂もくく成能すもくまう

六月七日 龍王堂 陸神あり 堂あまを是を行ふ

先陸の役人二人堂の傍に有る法花方せん法方の両院立合行法あり
法多あつて陸役の者急然として陸の遠ふゆく龍あつてする人五人
あつて神方の油をなすもくまう之其行法より其者解のさめぬくは
聖りよつて一もあつてはまう三つも龍よつてするあつては

藏王堂

足ら花の塵のいひゆり

吉野會式 蘇瓦と 尊等上人 遺徳堂

毎年三月一日花供養職法ハ以上人ハはまう 毎年三月十日吉野
會式蘇瓦といふは日子も龍のあ社の神樂六二基花王堂へ後
るは乃て神樂持合をさつあつてあり 龍王堂より万燈方寺家方

立合して法花千部修行ありまう行ひ果て蘇を耐くまあり因之あり
生あ人々正月の内より死る寺より里よりあつてはまう

上布より飯見より下市と越て六回ありのわら 陸路山をなす 高直の
穢より向ふ

さう水も山よ 風もけハ六回の後よまのり

飯見也 飯見より 田あ

下市より町あなり吉野川の鮎を製は其魚をり器つる
飯のかつてはつてつるすといふ者唐なり

上布より龍門の谷の中へ入地川の川辺あり川をなすて味山あり

あひま

我まのりゆり川のよきさへハつてまの山のまの山あり
ちりよのりゆり日かつ花櫻田の谷さくく嶽望空の花滝さくく布川の橋
雲井さくく花夫倉花花の水嵐山と亀山の山字に都へくつては神橋山
は天武帝より五節の音をけりむ

ちりよの橋 長者より一月のえまのり 日かつ花七曲あり

一めんとすまをいふ花夫倉中院谷は谷々深の義経をかくされ
しあふ山伏かたれ籠るすまのつふ岩ありまら依る忠信うまに
かりて横川の覺乾う討川一而也又忠信ふせき夫狩りうま
花夫倉といふそ花龜の水着つこの里はあり名水なり

嵐ふら龜山の山守ふ都ふうきり

人皇八十九代龜山院の帝の山所を嵐山よ建らうまきやう花を
うつ極今の曇滅の天竜寺其吉跡なり

袖ふる山ハ淨見原天皇天武帝吉野宮よまうして日くはるまを
ひまのひよひの雲あふりあふらふ向ふ乃岩う神女のからうま
髻髻う曲うあうてあう他の人さるまをひひ天の羽衣の袖を
あひうま

乙女子うまあまいするか玉を杖よまきうて女子いませ
とくひりる五節の音のけあなる

十一月の立五節の梅とつうま五節童世覺の時お暇はあま
てうくの紙をかきうて梅をつみまを世あまうてあうは日

よまうてあまのくまのあまのあま

今物語

信安の作

追まはせま五節のころあまのあま誰とくまあまの女のおま
きまのひあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま
らうまあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま
らうまあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

日月中の丑の日五節悟基の哉といふはま根元はあまの柳もれ

あり梅もあま

悪鬼

清輔もあま 瓜梅もあまあまのあまのあまのあまのあま

古も花も醜女も世あまのあまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

和名梅梅ハ側悲乃互和名又之トあり梅ハ抗批の慈名なり

梅ハくきまごくのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

源平盛衰記

高都波瀾の時吉野を徒すつめを討つてななるは忠信ま
 たりしに某はあふし何れもを徒す斗すし一すの敵を中興忠
 信は今世の敵をいひしはあふしを討つて忠信をなすはあふし
 面くしつとすしつとすしつとすしつとすしつとすしつとすし
 るのよめをゆめゆめ
 別府の鐘を慶つた刀もに勝る神の宝をぬるあり
 源平并雅章とすしつとすしつとすしつとすしつとすしつとすし

つとすしつとすしつとすしつとすしつとすしつとすしつとすし

おのあへるよすしつとすしつとすしつとすしつとすしつとすしつとすし

大平丸 村上義輝の碑を勝る神の宝をぬるあり

村上彦四郎義輝の碑を勝る神の宝をぬるあり
 あふしをなすはあふしを討つて忠信をなすはあふし
 勝十文のの。かき切つてつとすしつとすしつとすしつとすしつとすし
 勝る社 大宮の宮二社あり 勝る神 勝る命

清氏神草子よ みまりの神 又ふまふ七

かむさあふしつとすしつとすしつとすしつとすしつとすしつとすし

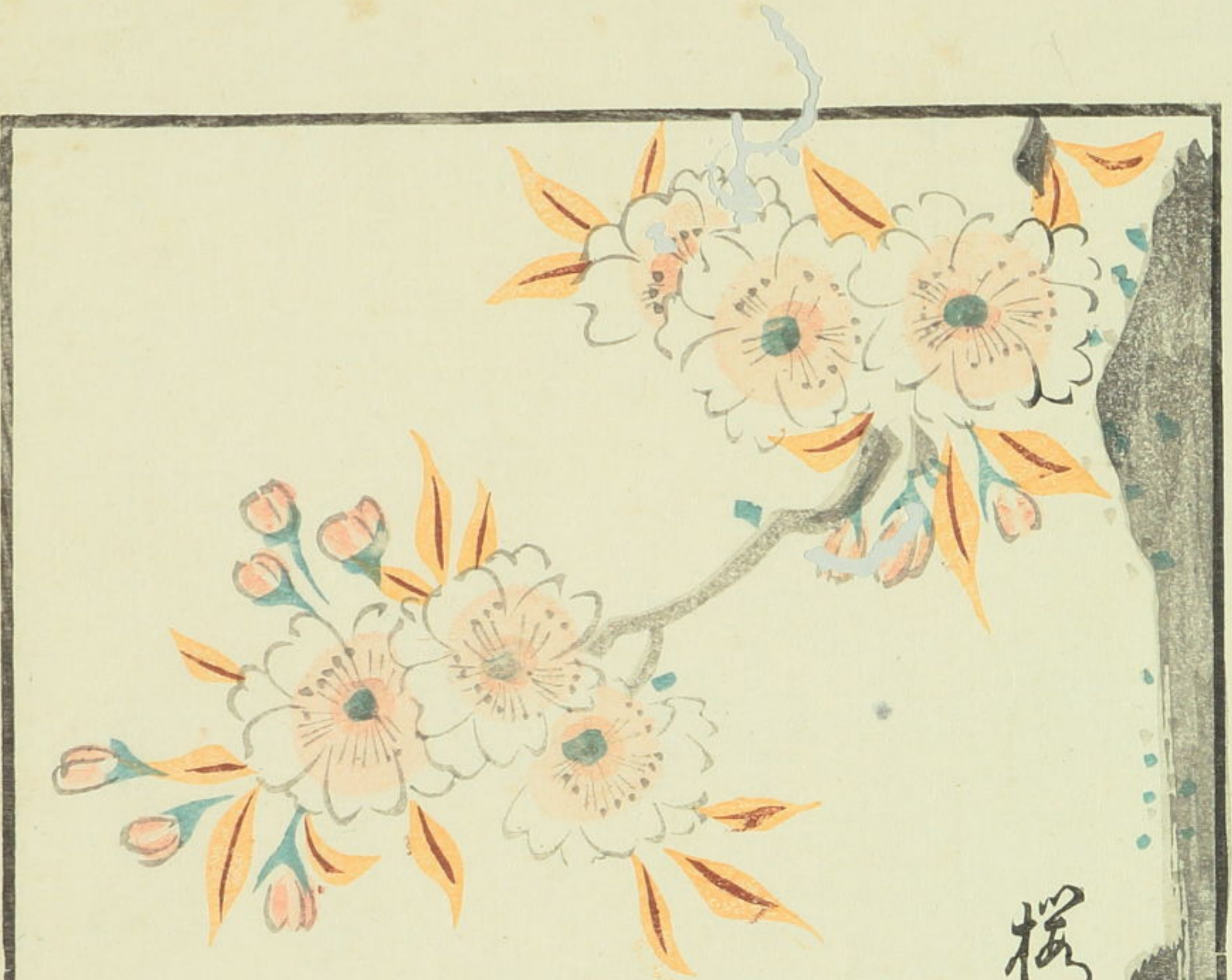
月次祭祝詞

水分坐 皇神等 前々白々吉野宇地都 神島木登御名者白旦

根木の宮金勝の神々神名帳 曰 金峯神社

吉野山地主神として今も此の嶽の名もさうよ起つて
 大滝宮滝西河乃滝高滝輝つとき清め滝葉あつて川つとく清水おあ
 の宿神子の水知れ尾の鐘龍返りの名電石玉石大枝取人丸場りまの居
 鐘かけのねかけりふのふか根川坂琴堂琵琶山青根つ嶺 釈迦がけ
 七十二かひき八十の滝皆これ頂達二ツの西のあり

大滝一名西河のときしつとすしつとすしつとすしつとすしつとすし
 あふし大石あり其のありしつとすしつとすしつとすしつとすしつとすし
 せのありしつとすしつとすしつとすしつとすしつとすしつとすしつとすし
 7岩の上よりあふし入る人よんせし 鼓をともす



桜ハ全畫の

似城也

三月晴高風子

おひら

風俗

り末

の

の

一点も

うの

茶

三十一

三十一



桜ハ全畫の

此画ハ五老井自画賛百花譜の画巻物
 中々大雅堂毛紙々々々々々々々々々々
 素懐八富、又々々々々々々々々々々々
 筆をかめて去也、賦のさ々のちぢみ
 々々々々々々々々々々々々々々々々

三十一

三十一

芳野山是花 吉野水是花
何只山子水 乾坤曾是花

定まらば日満し〜に夢あき物にききつらにききなら緑か〜
花又んとまほひ車か〜。せん〜むゆやたふ〜人
み〜や〜い〜ま〜ん〜と〜花〜さ〜る〜か〜あ〜ん
春〜あ〜い〜ち〜の〜花〜の〜日〜あ〜あ〜み〜の〜あ
は〜は〜の〜あ〜の〜あ〜の〜あ〜の〜あ〜の〜あ
〜の〜あ〜の〜あ〜の〜あ〜の〜あ〜の〜あ
西行

雪や木栖のあめり 笛のききま
只の時よゆらあめり のさくら〜こ〜ゆ
〜の〜あ〜の〜あ〜の〜あ〜の〜あ
花よりさあ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
さ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
水中花の浪こくる 牛車
貞徳

三つあ〜い〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
花のま〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
の〜も〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
〜の〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
花のま〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
花をさ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
花むら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
花と化〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
か〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
守武よ白
桜〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
守武
い〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
よ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
乾坤姦住同行二人

膾々魚膾とわらふるもめでたき魚をいふなりけり酒膾を者のり
こそ本ものよと調なると取ちり酒を肴み花を賞りて日のく
そりしめたる酒も昔とていふ一むらやちみもあはれをけり
膾もといひしるも他道流のよきも今之をすしけて他をいふら
のりや^{イミシメテ}右眼今眼といふもいふよしく心かけて人の心を味あ

集外三十六歌仙

山領 山灰 龜

平常 塚

立のりもいふるもすしハ^{イミシメテ}龜をこそいふいさや昔のよき雪

東野 初 東下野守美濃城主能傳歌道又を益々

殘 春

津守 小豊

芳ゆ山をさき述見一人のちりくちりる花のふる里

任吉 神主 従三位

寄舟 亥

宗 碩

くかきゆく^{イミシメテ}如流といふおもひてよんかかき居つらよ

山名氏 藥塩 卓也 者 宗 祇 門 弟

月 前 屠

永 閑

つそむる雲井の居の声よもおもはるる月のかけか

禁中 山 萬子 司 二 口 能 登 源氏物語 水一 巻 他 者

曙 雪

正 徹

あつゆきの雲井に^{イミシメテ}に^{イミシメテ}おのねとすすまうゆきの

東福寺の書記 後小松院 山字 此 草根集 あり 徹書記

初 逢 忌

正 廣

釣竿の如きゆりや月のあけぬらん日ころの袖よもいふる

正徹 中子 けい ころの 正廣 つみ

浦 橋 衣

兼 載

秋のかけらもこの浦のさくらもあはれ衣今やらん

陸奥 任人 猪名代 氏 宗 祇 門 弟 園 藍 集 あり 子孫 仙 居 也

冬 野

道 灌

かき衣 裾ゆき あり 花すき 不のそり かけらもいふる

山内 上 板 家 老 太 田 氏 入 道

寒芦風

長慶

難波風入江より音さきて芦の枯葉のかけをきき
三好修理方又義輝公執權

旅宿霰

宗養

風ませにあきたるる笹枕さるむすめ旅宿のひき
宗紋男連歌師

閑雪

政宗

さびしき誰六裁へんを道乃せきの戸うつむおぼのふき
貞嘉五守伊達氏

梅香留袖

兼与

誰の袖よりひそめておのこも色あすくまの庭の梅枝
猪名代氏連歌師

遠村

玄陳

遠くに夕つゆの声さるういさこの里はやうと
里村氏去仍子京任連歌師

待花

留俊

芳野の花竹ののりま〜 心わく 雲のま〜
佐川田太永井家老武功著宗鑑回付人

山家初冬

尚澄

山わけ乃初冬のり〜 時雨〜 雪〜
駿馬惣社官

月思往事

長嘯

世くのく月〜 しみ〜 かし〜 袖に
美濃五守従四位少将若狭守勝俊秀吉公甥

閑月

宗祇

きよ〜 閑月〜 竹〜 月〜
元嘉人飯尾氏常縁和歌を甲入則古今集と傳入連歌
中兵也号自然齋種玉庵文亀二年七月廿九日卒八十二歳
遺骨ハ駿馬院東郡柘園定勝寺あり

月前述懐

心歌

くわゆる神心ふふめりたりて

横川住心院權大僧都能連歌社言一卷著文明七年七月十日卒

杖声驚夢 基 佐

竊の種を種にまきつるの秋

武家権井彌三部能連歌辰永仙

月前遠恨 肖 栢

かろくしつて客人のかつておる月の恨

文龜年中の人連歌新式今案集作者堺住中院家通純公

才老後落亂子京加茂宮人平井氏之母懐余娘之半井

ト養其血脉也大永七年四月卒歳八十三愛記春夢草著作也

山家灯 観 尚

くわゆる人住をさうりては山かけの草のしり

武家鱧川新島后而通号智温大徳寺一休同時人能連歌

曉 神樂 久 康

くわゆる曉ふくく声ふけく 神代まのの鈴の音

安宅氏

佛名タ 信巴

くわゆる佛の名を 鳴りて 思ふもえん 衣のあ

初周柱門才松村氏号宝珠庵臨江齋後里村昌休門人志

昌休早世後昌此為後見依之里村民之双生小大和太吉良後

東坂本住秀吉公時没取百五十人口昌也賜之

慶長七年四月十二日卒年七十九

田 鹿 全 古

きん又山田も 熊も 麻の音りをさるるを やまひてやき

丹後小田辺城主細川兵部少輔春孝二位法印号出齋

行路時雨 心 前

かろくしつて 熊の 衣の 鳴りて やまひての 雨の

去陳子信巴一人也

山月入笈 淨通尼

秋の木の葉のふくくを あらみ みるの 山の 露の 月

光源院義輝公後室

春 祝言

宗 長

青柳のなほひらと人のくろくろもて通ある四代のまこと

後加茂子兼屋庵主宗祇門弟天文元年三月六日卒

柳

元 純

ま柳のまろくかへひまのくはけつ、少の美のけけらるるむ

守屋守も利大膳をま

閑 居

氏 康

中へまろくかへひまのくはけつ、少の美のけけらるるむ

因八加主北條左京大夫

松 間 花

信 玄

まろくかへひまのくはけつ、少の美のけけらるるむ

甲斐守武田信玄は秋後世説甲斐守をまろくかへひまのくはけつ、少の美のけけらるるむ

寄 松 祝

氏 政

守り松屋の引きと住すの松のまをせのよろつ代の春

小桑氏

川 五月雨

氏 真

昔は川流のまろく浪若くして指よかへひまのくはけつ、少の美のけけらるるむ

今川氏

寄 枕 意

昌 兜

あつれもろくかへひまのくはけつ、少の美のけけらるるむ

里村氏法眼

初 春 時 雨

宗 收

今も秋のまろくあつれもろくかへひまのくはけつ、少の美のけけらるるむ

周桂宗牧永田のつきさなり

江 迎 寒 月

政 一

風とてよきまの後のあつれもろくかへひまのくはけつ、少の美のけけらるるむ

小橋遠の舟系道よかまらあり

月

貞 徳

雲とてよきまの月のあつれもろくかへひまのくはけつ、少の美のけけらるるむ

花田浦小松東須賀の浦千賀の浦小松青白濱石浦金井、奇大淡丸、
浦々の傳言田淡垣、淡大正傳英竹の浦てゝ奇寺崎産、奇黒奇翁
傳不袋傳よる傳と名傳ふく傳昆山門傳糸天傳月傳松伝傳小田傳藤、
傳陸、傳取傳小福傳千部傳の侯傳、相石傳千愛傳行人傳杖傳床傳鳥
傳尾傳一足傳發傳長傳官傳海老傳火打傳鯨傳早百傳つけ傳鳥かて
傳之傳、傳都傳鐘傳二子傳心島さいて傳佛傳内裡傳養傳中て人傳
女も傳伊傳傳

世の中らつてゝもあはらさなく世の中好のつゝあはらさく鐘舎石伝
末の松山つてなりて松のひまくは墓をまつくつ松をかり枝をまつくつ契の
すゑも終りけりかゝの松と遊

能同寄松よりみ

末の松山つて元の松中の松末の松と三重のあつととされは山とて末乃
松とよめるも傳とて今葉は末の松とよめる、八傳氏は

浪こゆるも末の山とよめる傳の集
よ松を松末の山とよめる傳の集

末の山むかひより松尾をまきく松とよめる歌はあはらさく
元真集

末のねまの人をのりあつて我をい渡つてあはらさく
ちきりきかかみは袖をまきりて末のねら松とよめるとい元傳
尾をおきてあはらさく心を我りてはまきく松とよめるとい
松とよめるといて松とよめるといて松とよめるといて松とよめるとい

羽をかき枝をまきく長恨歌 七月七日

長生殿夜半無人私語時 在天願作比翼鳥
在地願為連理枝

野田の玉川仲の石宮城野の萩武隈の松松は境は名とていへり

本朝文鑑 六玉川お賢 傳 本草

弁重の淋しき一葉を押しつけは其山吹の黄玉をさくさくも渡舟の
花のおかみさく一里さくさく舟の杵をけり淋しきあはらさく月影の
かゝらうは風を吹かしさるるまきの声くも言也の奥の谷あはらさく

陸奥より縮圖

一板々首途の海へ
雲より月より

舟我



松野

楳

椿

松野

松野

松野

松野

松野

松野



松野

松野

下は地やく亀とつらありなきなるたき魚の如く此物の中常なる白
丸目斗ありてつらなるひつらなるるるも又洪水の如くもそのまき
甲よりくもあやきりの海流ありて四丁斗をみるや市守石版の上い
きの内は五つ並んでありてつらなる一ツは海にまきしるも其あやきり
則つて

まゆり又もまきり人松竹や小竹の竹をほらあきり
まきりきく松竹鳴りあきりむ心ある聖なる位なり

瑞岸寺ハ春福山と号し山法心和尚と常以真壁郡の人俗名
真壁平四郎といふおき時仕者凡一旦あきりありま主人本腹を
もて平四郎とち平四郎大さき志願して其本腹の欠くをいひまき
けり心逆は傍とち其後まきりては本腹の欠を錦袋に入
てけりかけ動止しれをぬき人その故をいひ是錢昨なると終まきり
へて監齋宗と傳し初朝の後瑞岸寺を定其時の偈は日

一住ニ經山弄風光一归来ニ坐圓福道場一法心學子
無一物本是真壁平四郎

法蓮寺ハ海岸の時老杉影とひく花簾波はひく松のみりこま
やうに枝まは風は吹ぬめて屈曲おのつらあきりなるけき窓
花して友人の顔と花ふちちや振神の音大山祇のりせりまきりや
造化の天工いつれの人の筆をうみひ詞を畫さむ

花簾ハ鐘なり 管絃はるるあきりてあきりなる件に

松竹やまきりの歌はあきりせ聖の袖をかくいぬれし
ちの富の香の袖をまてそれかりつらも浦のなるまきりむ河

我意の松竹もさきりてのうけり 西産
松島や名もあきりなる春の歌 法徳
まきりまきり松竹けり二人春死人 素堂
松島や松竹あむもは 亭 且申
ちのけり松竹は 誰のみの早見見
聖なるもの

一まきりなる音かきりまきり本なり 仙化

は松竹の賦も三西ありて異同なる其のなきなるハ能行あり

卷之十一

降くわくしるなりは西行行なりのおくまの樹今ふあつはま

ふまなりこれ坂電以神の示現なりといふ
富の山 富山大作もはあなり松崎雄為其外の島く浦く目の
下ふんおろしるもくく松のけしき詞は後なり松崎をなすなりなり

まなはし 松崎くくくくくくく

松崎



風俗文選大註解卷之貳上終

群甘藏板

